

ニコラ・フラメル著
有田忠郎訳

『象形寓意図の書』

賢者の術概要』

「ヘルメス叢書」第一巻。本書には一四・五世紀のフランス人錬金術師ニコラ・フラメルの著作中『象形寓意図の書』*Le Livre des figures hiéroglyphiques*、『賢者の術概要』*Sommaire de l'art philosophique*、『望みの望み』*Le Désir désiré*の三編が翻訳収録されている。ここでは特に、『象形寓意図の書』を中心に紹介したい。というのは、すでに広く知られるようになったとおり、錬金術における象徴的な図像は、そのもう一つの語法であり、錬金術そのものが巨大な語彙の体系である以上、フラメルが「たまたま入手」した書物中に見たとし、また彼自身、パリのイノサン墓地の納骨堂に素描彩色させた寓意図の解説は、とりわけ重要であると思われるからである。『賢者の術概要』は図をとともなわないが、内容において前者とほぼ同一であり、『望

みの望み』は、アレクサンドリア以来の錬金術書の抜き書・註解めいている。

『象形寓意図の書』は、一六一二年アルノーによって仏訳出版された。本書はそれを底本としたドノエル社版（一九七〇）からの翻訳である。ラテン語による原本が現存しないために偽書説もあるようだが、エジエース・カンスリエは、本書巻頭に付された「ニコラ・フラメル その史的研究」で、ビエール・ボレルの『目録』中にラテン語書名が見られること、また他の仏訳が存在することを根拠に偽書説をしりぞけている。少くとも、フラメルが納骨堂の列柱のアーチ部に描かせた彩色図が一八世紀まで存在したことは確かで、偽書説をつとに主張したヴィランもそれを観察した。

その図は、本書九二・三頁にみひらぎで掲載されている。図は大きく三つの部分に分けられ、中央には三角形のかこみ中に、地球儀を抱くキリスト、その頭上に三体の天使、両側に聖パウロと聖ペトロ、それぞれのもとに膝まずく男女、さらにその両側に天使が描かれている。図の下部には五つ

の寓意的な図が一線に置かれ、さらに下方には、中央にヘロデによる幼児殺戮の図、両側にフランス語で、「ニコラ・フラメルとその妻ベレネル」「いかにして幼児達がヘロデ王の命令によって殺害されたか」の文字がある。左下隅には、妒を様式化したかこみの中に、インクつばを持つ手が描かれている。因みに、本文中で用いられる右・左は、われわれが一般に図を見て思う（すなわちむかって）右・左とはすべて逆になっている。意図的な逆称か、それとも図像学上の約束なのだろうか。

図の上部には、七つの正方形の区画中に、寓意的な図が描かれている。これらⅠからⅦまでの番号の付せられた図は、フラメルによれば、彼が入手したユダヤ人アブラハムの著すところの書物の、七葉めごと及び第四・五葉に描かれた図の転写であるという。それらはたとえば、山頂に咲く花と、そのまわりを烈風を衝いて飛ぶ龍とグリフオンの図であったり、互いに相手を呑みこもうとする二匹の蛇の図であったりする。アブラハムなる著者によれば、それは金属

変成の最初の「動因」を示すものであった。

本文の前半は、フラメルが書物を入手してから、二一年後にユダヤ人学者に邂逅してこの図の謎解きを得、「金属純化」に成功するまでの経緯を記しており、後半は図の中央部・下部のヘルメス学的な読み方の解説にあてられている。興味深いのは、フラメルが「図を見る者の能力と知識に従って、二つの事柄を表現」することを考えていることである。その第一は「最後の審判とイエスの再臨の日に行なわれる」「来たるべき不可避の復活の秘儀」であり、第二は「自然哲学に通じたひとびと」への、錬金術の「実験操作一切」の教示であった。

こうした表現のアンビギュイティは錬金術につきもので、フラメルも折にふれ二重の意味を語っている。しかし、どちらかといえば、フラメルは、錬金術特有の、一つのことばが多くを意味し、多くのことばが一つを意味する語法を利用した、語りながら匿すという難晦的な伝統からはまぬがれているようである。『望みの望み』では、フラメルは、「一つの方途」「一つの作業法」

「ただ一連の色彩の出現」そして「真の名前はただ一つである」ことを強調している。本書が全くの門外漢であるわれわれにも比較的読み易いのはそのためであろう。

中央部・下部の図は、番号をおって読むならば、最初に用いられる「容器」と「原質」、そして腐敗が始まって熟成にいたるまでの、レトルト中での金属の変成過程を示す一種の地図となっている。とりわけ、克明に記される図の細部の彩色は、実際のレトルト中での、あるいは象徴的な色彩の変化と対応している。一般に錬金術では、「黒」「白」「赤」が、過程を示すものとしてシンボリックに用いられるが、フラメルははるかに念入りに色彩の変化を語る。たとえば最終段階を示す第八の寓意図(翼をもつ獅子とその足をつかむ男が描かれている)に彼は、暗紫色、緋色、赤橙色、真紅などの色を点している。

とまれ、われわれが西洋のこうした秘教的な思考と表現にどうしようもなく無知であり、全く不慣れであることを知るためのみにも本書は読まれる価値を有しているだ

ろう。巻末の訳者解説は、四つのタイプのフラメル伝説を検討しておりたいへんに示唆的である。

(四六判 二五六頁 一九七七年七月 白水社
「ヘルメス叢書」1 二〇〇〇円)

(川島昭夫 京都大学大学院生)

会 告

昭和五十二年度史学研究会大会および総会は、予学通り十一月二日(水)午後一時より京都大学楽友会館で開催された。公開講演は狩野久、佐藤長両氏により、つぎの演題で行われ、盛会裡に終りました。

木簡研究の諸問題 狩野 久氏
古代チベットの軍制について 佐藤 長氏

なお、大会、総会に先立って開催された秋季定例理事会・評議員会において、役員交代の件が議せられ、川勝義雄氏が監事に、網野善彦・井上秀雄・柴田三千雄各氏が評議員に、それぞれ選任されました。

史学研究会